

すみだ地域学情報

第32号

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ☎ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

2015年
(平成27年)
4月発行

ふれあい活力 ゆびり
すみだ

We!



現・墨田区に住んでいた碁打ち ——本因坊家屋敷跡——

■現・墨田区にあつた本因坊家の屋敷

最近は江戸時代の围棋史、特に江戸時代のプロの碁打ちが注目されています。碁打ち安井算哲（あいわいさんてつ）と天文学者渋川春海（しづかわ しゅんかい）を主人公にした冲方丁（おきがた とう）さんの『天地明察』という小説がヒットして、映画化もされました。また、井上幻庵（いのう げんあん）という碁打ちを主人公にした百田尚樹（ひゃくた まさき）さんの『幻庵』という小説も、『週刊文春』誌上で連載されています。みなさんは墨田区に江戸時代の碁打ちが住んでいたことをご存じでしょうか。

江戸時代のプロの碁打ちは、プロの将棋指とともに、江戸幕府に禄をもつて抱えられています。碁打ちの家は本因坊家・井上家・安井家・林家の四家がありました（渋川春海は安井家の、井上幻庵は井上家の人物です）。

本因坊家は、初代本因坊算砂（さんしゃ）が徳川家康に重用されたという特別な由緒をもち、将軍家に拜礼するときに、本因坊家当主のみ、幕府の役人から「本因坊（ほんいんばう）」と名を披露されています（当時は「ほんにんばう」と呼ばれていたようです）。

その本因坊家の屋敷跡は墨田区両国三一五七にあります。

墨田区はその場所に「本因坊家屋敷跡」という掲示板を建てています。この屋敷は幕府から拝領したものであり、三〇〇坪の広さでした（国立国会図書館所蔵「町方書上」によれば「表間口京間拾五間・裏行同二拾間」とあります）。このうち、一三〇坪は当主や弟子たちの居住部屋・研究部屋で、その他一七〇坪は他人に貸し賃貸経営を行っていました（この賃貸経営は幕府公認でした）。

三代本因坊道悦（どうえつ）の時代、寛文七年（一六六七）でした（この時に拝領した屋敷は、本所のどこ地であったのか、不明です）。

その後、寛文一〇年に芝金杉（しばかなぎ）の地に屋敷替を命じられ、そして、四代本因坊道策（どうさく）の時、元禄元年（一六八八）、再び本所の地（墨田区両国三一五七）に屋敷替を命じられ、そのまま幕末になります。



本因坊屋敷跡周辺

■拝領のいきさつ

諸説ありますが、最新の研究成果に拠ると、本因坊家が本所の地に屋敷を拝領した時代は、



掲示板

前で囲碁を打つ「御城碁（おじろご）」を、毎年一回だけを行うのみでしたが、当主・弟子ともに、その場で勝利するという名誉を賭け、必死に修業しました。なかでも評価の高い人物が、前述の四代本因坊道策です。いまも彼の棋譜（手順を示した記録）が残っていますが、いまのプロ棋士さえも唸らせます。「実力十三段」といわれるほどで、実力は群を抜いていました。幕末に出現した本因坊跡目秀策は、本因坊家の家を継がずに亡くなりましたが、御城碁十九連勝という輝かしい記録をつくりました。百田さんの小説に出てくる井上幻庵も、この秀策と対局、劣勢と判明した時に耳を赤くなりました。これを「耳赤の一局」といいます。秀策の師にあたる十四代本因坊秀和（しゅうわ）も、現在、日本棋院の囲碁殿堂入りを認められている名手でした。

本因坊歴代当主が残した棋譜は世界的にレベルが高く、現代でも評価され、日本ののみならず韓国・中国の棋士たちにも多くの影響を与えました。「昭和の棋聖」と称された中国出身の棋士、故・呉清源（ごせいゆん）さんも秀策の棋譜を勉強しました。その囲碁文化の発信源のひとつが墨田区の本因坊家屋敷跡です。

碁打ちたちの仕事と技量

本因坊家をはじめとする碁打ちの家は、師弟相続・養子相続で、実子相続をする例は多くありません。囲碁は実力勝負の世界ですから、実の子どもが囲碁に優秀でないと家がもちません。それで、日本全国から腕に覚えある者が碁打ちの家に集い、当主の座を争つて切磋琢磨しました。

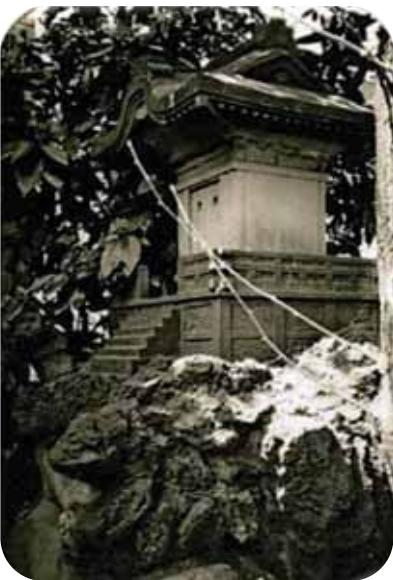
碁打ちたちの仕事は、将軍の目の前で囲碁を打つ「御城碁」を、毎年一回だけを行うのみでした。が、当主・弟子ともに、その場で勝利するという名誉を賭け、必死に修業しました。なかでも評価の高い人物が、前述の四代本因坊道策です。いまも彼の棋譜（手順を示した記録）が残っていますが、いまのプロ棋士さえも唸らせます。「実力十三段」といわれるほどで、実力は群を抜いていました。幕末に出現した本因坊跡目秀策は、本因坊家の家を継がずに亡くなりましたが、御城碁十九連勝という輝かしい記録をつくりました。百田さんの小説に出てくる井上幻庵も、この秀策と対局、劣勢と判明した時に耳を赤くなりました。これを「耳赤の一局」といいます。秀策の師にあたる十四代本因坊秀和（しゅうわ）も、現在、日本棋院の囲碁殿堂入りを認められている名手でした。

本因坊歴代当主が残した棋譜は世界的にレベルが高く、現代でも評価され、日本ののみならず韓国・中国の棋士たちにも多くの影響を与えました。「昭和の棋聖」と称された中国出身の棋士、故・呉清源（ごせいゆん）さんも秀策の棋譜を勉強しました。その囲碁文化の発信源のひとつが墨田区の本因坊家屋敷跡です。

（墨田区文化財調査員）

高尾 善希

向島の富士信仰



さて、こうした文化的所産にあらためて目配りしてみれば、日本の代表的な靈山を望みえたような場所では、こうした自然の環境が地域の歴史に何らかの刻印を残した可能性もあるよう

押上の富士塚の築造年代は不明ですが、墨田区教育委員会の調査記録によれば、それは高さ約2.3mの小さな富士山。丸不二

講という名の富士講の関与が伝承されていたようです。近年滅

立地は江戸時代の請地村、明治22年（1889）以降吾嬬町に編入された場所に

示す貴重な史跡でした。また、向島方面では明治初年以降、寺島村新田の住人が中心となつて結成した山玉向嶋講社という名の富士講が活動し、高木神社や白鬚神社に記念碑を建立しています。その山玉向嶋講社には須崎町の住人も含まれましたが、その須崎町の住人を氏子とした牛嶋神社の境内にも、実は富士信仰に関連する遺物がひつそりと残されています。ほぼ中央に「富士山」と大きく彫り、その上に富士の山体を表現した三峰の図を線彫りした自然石です。「小御嶽石尊大權現」なる神号銘も確認でき、北口から富士山を登拝した集団の閔与も感じられます（右下写真）。

牛嶋神社は関東大震災後の帝都復興事業の一環で現在地に移転していますから、いつ誰がどこに設置したものかは今や不明ですが、この石が富士山を供養するための儀礼の場の在りかを

今や地上から目にすることは難しくなりましたが、現在の墨田区域では、かつて晴れた日ともなれば南西かなたに富士山を望むことができ、その情景は古くから人々の心を魅了してきました。

関係を物語る史跡がいくつか複数に入ります。その一つが押上三丁目にあつた「押上の富士塚」でした（左写真）。

この付近に暮
した人々の間
に富士信仰が
着実に根づい
ていたことを
示す貴重な史



墨田区で富士山と言われば何よりもまず北斎の作品を思い浮かべるという方も少なくないでしようが、実は今や向島にこそ富士山と土地の人々との関係を示す史跡が数多く確認できるのです。北斎の作品に「日本文化」を見るのもよし、しかし一方で、土地に暮した無名の人々が残したものも、こうした史跡にもぜひ目を向けていきたいものです。

示すアーヴィングの復讐を果たしていたことはほぼ確実です。牛嶋神社の周辺は、富士山を遥拝するための恰好の場所であつたものと推察されます。江戸時代後期の官撰地誌『新編武藏風土記稿』に目を通してみれば、牛嶋神社旧在地の東隣に所在する弘福寺にも、昔は「箱根権現・浅間・熊野合社」が祀られています。

(墨田区文化財保護指導員)